

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530172

研究課題名(和文) 多角的国際関係における日露両国の和解プロセスについての基礎的研究

研究課題名(英文) The fundamental research on the reconciliation process between Japan and Russia after the Russo-Japanese War in the diversified international relations

研究代表者

寺本 康俊 (Teramoto, Yasutoshi)

広島大学・社会(科)学研究科・教授

研究者番号：00172106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日露戦争後の両国がいかなる背景、理由で接近し、国際関係がどのように変容したかを、原資料などを使い、分析、検討した。日露両国は、新聞、雑誌などの特派員による報道によって、相互のイメージ、特にロシアでの対日イメージが大幅に改善されることになった。また、両国の外交的視点から、中国に於ける満州、蒙古などの勢力範囲の設定という相互の国益の確保、増進のために接近した。そして関係各国も冷徹な国際政治的判断によって、自国の国益確保のために日露両国に外交的な働きかけを強化した。これらは、現代の日口関係に於いても相互のイメージの改善が求められること、また相互の国益の確保が必要であることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes the reason and background of the approach between Russia and Japan after the Russo-Japanese War and the change of international relations. In those days, mutual images, particularly Russian image toward Japan and Japanese had been changed greatly and both Japan and Russia tried to extend their national interests in Manchurian and Mongolian sphere. These historical lessons suggest that the mutual improvement of their image and mutual recognition of their national interests need to be required.

研究分野：国際関係論

キーワード：外交史 国際関係史 新聞・雑誌 世論

1. 研究開始当初の背景

戦前期に於ける日本外交の大きなターニングポイントであった日露戦争後の日本外交とそれを取り巻く国際環境の変容はまだ不十分な研究状況であり、それを詳細かつ論証的に研究し、日露戦後の対立から和解に向かった日露両国の外交関係と当時の激変した国際関係を研究することで、現在の停滞する日口関係の打開に示唆を与えることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、国際関係が激変を極めた日露戦争から第1次世界大戦及びロシア革命の時期までに於いて、日露両国がどのようにして外交的・軍事的レベルの対立と国民レベルの相互不信を克服し、第4次日露協商という軍事同盟関係を締結して、両国の協調、和解という関係にまで修復できたかを、多角的国際関係の変容に注目して、分析、検討するものである。そのために、日本、ロシア、イギリス、アメリカ、中国などの外交政策について、原資料に基づいて国際的な研究を行うと同時に、それだけでなく、各種の新聞、雑誌などに現れた日露両国の世論の変化を分析し、日露関係の変化について総合的に研究する。そして、この研究成果から得られる考察から、現在、北方領土問題で停滞している日口関係の協調、和解に向けての方策を探ることを目的とする。

元来、これまでのこの時期の日本外交史研究は、日露戦争後の日本外交の展開に専ら力点が置かれてきた。本研究は、可能な限り、原資料などを使い、日本、ロシア、イギリス、アメリカ、中国など5カ国の外交政策を検討した国際的研究を行う。そして、日露両国の外交関係だけでなく、新聞、雑誌等のマスコミや世論などの分析、検討を含む総合的な視点からも研究に取り組む。即ち、日露戦争後の国際関係の激変の中での、日露関係の対立から協調、和解に向けての外交レベルの相互関係の検討のみならず、日露両国の新聞雑誌等のマスコミや国民世論の変化がどのように日露両国の外交関係に影響を与えたかという点を含めた多角的で総合的な研究である。従来、ロシアでは資料収集の面で大きな制約があり、これまで基本的にはその制約を克服できず、本研究のような国際的で総合的な研究はこれまで他になかった。特に関係各国の外交文書や関係資料などの資料に基づく国際的研究はまだなされていない。また、日露戦争後の日本で多角的な国際協調外交を行い、第1次日露協商を締結した林董外相の外交政策の研究も、極めて少ない。本研究グループは、これまで一定の成果をあげてきたが、研究実施期間や研究経費等によりいまだ未完成であり、この研究目的を、可能な限り、実施することを目指したものである。

資料面では、近年、資料の閲覧が可能になったロシアの「ロシア帝国外交資料館」(Архив внешней политики Российской империи)の外交資料、及び「ロシア国民図書館」(Российская Национальная Библиотека)の新聞、雑誌資料を調査し、資料収集する。さらに日露両国の外交政策をめぐる関係

国の国際的対応を分析、検討するために、日本での外務省外交史料館、国会図書館憲政資料室、防衛研究所資料室だけでなく、イギリスの「国立公文書館」(National Archives: Public Record Office)、アメリカの「国立公文書館」(National Archives and Records Administration)などに於いて資料を調査、収集する。これまでの研究で部分的に資料収集を行っているが、まだ関係各国の多くの重要な外交資料や新聞、雑誌資料が収集できずに手付かずで残っており、今後、これらの重要資料を収集し、精緻に分析、検討することが課題である。

以上の様に、本研究は、日露両国が日露戦争後の国際関係の中で、どのようにして対立を克服し、信頼と協調の関係を構築し、和解にまで外交関係を展開し、国民の世論を形成できたのかについて、その原因・背景と経緯を主要な関係国の原資料などにより調査、分析し、検討する。

さらに、この外交史的研究による歴史的教訓を参考にして、現在、不安定な関係にある日本とロシア両国がいかにして友好的な信頼、協調そして和解の関係を構築できるのか、という日本外交の現代的要請について考察するものである。

3. 研究の方法

国内では、小村、林、内田、加藤、石井外相と陸軍の外交政策を研究するために、外務省外交史料館、国会図書館憲政資料室、国立公文書館、防衛省防衛研究所資料室などの資料を分析、検討する。国内で明治期の新聞、雑誌等をも分析、検討する。海外では、英国外相グレー、駐日大使マクドナルドを中心とするイギリスの対日、対露外交政策を調査するために、イギリスの「国立公文書館」(NA)でFO(外務省)、さらにCAB(内閣官房)文書などを調査する。アメリカでは「国立公文書館」(NARA)でこれまで未調査の日本関係マイクロフィルム RG59などを調査し、資料収集する。ロシアでは「ロシア帝国外交資料館」に於いて4次にわたる日露協商、外務大臣イズヴォルスキーの外交政策を中心に、対日、米、英関係の未公開の外交文書を緻密に調査する。また、サンクトペテルブルクの「ロシア国民図書館」では新聞、雑誌を、「歴史中央資料館」などでも資料収集を行う。

4. 研究成果

日露戦争後の日本とロシアの外交政策について、日露両国が日露戦争という激戦の終了後、いかにして、両国が急接近して、第1次日露協商を締結することになり、さらには第2、3次協商を経て、第4次日露協商という軍事的な同盟関係を締結するに至ったかについて、両国の外交と世論の双方の側面から、実証的に分析、検討した。

第1に、1907年、第1次日露協商が締結された背景には、日本、イギリス、さらには『ノーヴォエ・プレーミア』などの新聞、雑誌が、当時の日露戦争後の日本外交を担い、戦後の国力休養と南

満州に於ける戦後経営を担った西園寺内閣について、その日露協調への誠意ある対応を報道していたが、こうした日本側の西園寺首相、さらには国際協調外交を唱導する林董外相の積極的な意向が日露両国の接近、協商締結への推進要因になった。また、本野駐露大使は、日本による韓国併合の際の外交的影響について、それが当時のロシア世論を刺激し、ロシア政界で最も親日的であったイズヴォルスキー外相の立場を危機に陥れ、弱体化させてはならないと報告するなど、日露接近に強い配慮を示していた。さらに、その後、桂が1912年、訪露し、ロシアのココツォフ首相と会談していたが、ココツォフは日露戦争がロシア国民側に悲痛の記憶を与えたが、日本に対して少しも敵愾心を起こすことはなかったこと、戦争はロシア中心部には何らの危害を及ぼさず、海外での植民地戦争であると見做していたこと、ロシア国民の大多数は戦争に反対していたのであり、日露協商の進展に真剣に反対する者はいないことなどを率直に述べ、日露協商の意義を率直に披歴していた。ロシア世論の形成の面では、サンクトペテルブルク通信社の活動はロシアに於ける日本に関する情報提供の重要な媒体であった。この通信社の報道はロシアの新聞の多くに掲載され、社会に普及した。第1次世界大戦開始以降、日露両国の軍事協力のために日露関係は非常に重要視され、日露関係は改めて重視されることになった。日本とロシアは共同の通信社『Kokusai・Westnik』を設置し、またサンクトペテルブルク通信社のヴァスケヴィッチは、通常の報道の他に、定期的に日本新聞を評論し、新聞と政治との関係、日本でのロシアに対する認識などを通信するなど、当時の第4次日露協商に対する日本世論を詳細に分析していた。

第2に、主として、日露協商後締結後のロシアの世論と外交の変容について研究を行った。先ず、1907年日露協商の締結後、ロシア人は日本に大きな関心を持っていた。その理由は、小国日本が大軍事国家と見られたロシアに勝利を収めたということだけではなかった。日本人は外交手腕にすぐれ、卓越した官僚国家としてロシア人を驚かした。ロシア人はいわゆる「日本の謎」を解こうと思った。日露協商締結後、ロシア新聞は日本に特派員を派遣し始めた。即ち、1908年1月、新聞『Russkoe Slovo』は日本にネミロヴィチ・ダンチェンコを派遣した。戦後、ダンチェンコは日本の史跡名所を訪れる一方、日本社会生活を注意深く観察していた。彼の記事は毎週、掲載され、1916年、日露同盟の調印時、書籍としても出版された。彼は日露同盟を東洋での日本支配のために道を開いたという観点から批判的に見た。ダンチェンコの日本への評価をもっと広いコンテキストの中で分析すれば、日本に対する否定的、肯定的な見方の同時共存による客観的な認識があった。次に、外交的には、日露関係の正常化は、英露協商の交渉などの国際関係の大変化を伴い、東アジアにおける矛盾の結節点の日露から日米間の対立に転換したことを受け、日本は朝鮮半島から満州まで勢力範囲を広げ、新たな国益の勢力範囲を獲得する方針をとったことについて、ロシア国立歴史文書館で外交文書を調査し、ロシア科学アカデミーの図書館で

は新聞『Novoe Vremia』などの記事を調査した。このように、日露の和解プロセスについて、ロシアのマスメディアの中でどのように表現されていたのか、ロシアでの対日イメージが両国の和解に応じてどのように変更したかを検討した。また、日露外交関係の和解がどのような外交的経緯によるものであったのか、ロシアなどの原資料を収集、分析して検討を行った。

第3に、この時期、相互に警戒感が拭えない日露両国とも、満州を対象に勢力範囲を設定するという共通の国益が存在したという事情が根底にあった。外交的には、日英同盟、日露協商、英露協商からなる多角的な同盟協商関係による国際協調の構築のためには、日英露3国関係の外交的和解、融和が必要条件であり、そのための外交的な急接近が行われた。また、当時の辛亥革命による中国の混乱情勢が生じ、日露両国は鉄道権益の保護などで協力関係を拡大した。次に、当時のロシア社会では、日露講和条約とそれに続く日露協商で確認された日本の平和への意思がどれほど確かなものかという疑念も根強く存在していた。日露戦争当時、ロシアで最も人気が高かった新聞『ルースコエ・スローヴォ』の従軍特派員であったダンチェンコが日本への旅行とその旅行の成果の発信を行うことによって、当時のロシア国民の対日感情を友好的なものにすることに貢献したことを分析した。即ち、日露協商成立後の1908年、ダンチェンコは再度、極東に赴き、満州、日本、朝鮮、を訪問し、彼の現地報告は1908年2月から10月まで上記の新聞に掲載され、1916年には『太平洋の古代ギリシャ人』(日本人が古代ギリシャ人のように自らの力で文明を作り上げたという意味)を出版した。また、日露戦争後、自らの目で日本を旅行、観察し、日本を軍事的視点ではなく、文化、道徳、勤勉性、技術革新などの優れた国民性を紹介し、また大阪毎日新聞社での両国の協力の重要性についての意見交換などを多角的に分析し、ロシア国民に伝えた。こうした動きが日露協商の具体化とロシア国民の日本に対するイメージの変容に大きな役割を果たした。

第4に、日露戦争後の国際環境の変容の中での日本外交の対応について、これまでの研究のまとめを行った。ロシア外相イズヴォルスキーは、ロシア国内の情勢を重視し、極東と中央アジアの脅威を懸念し、また日本がロシア国境を侵害しないかどうかを非常に恐れていた。イズヴォルスキーは、イギリスに対して真の日露両国間の和平状態を希望していることを率直に伝えていた。これらの情報を踏まえて、イギリス側は、ロシア自身は日露戦争後、ポーツマス条約を誠実に遵守し、日本もポーツマス条約以上の事態に踏み出し現状を打破しようとはしないであろうという観測を抱いた。また、伊藤は、当時の中国問題が深刻であることに對して非常に憂慮し、当時、中国問題の情勢推移が極めて重要であると考えていた。極東の平和が日露戦後、国力が疲弊していた日本にとって、中国の混乱は日本にとって大きな痛手であり、極東に於けるバランスオブパワーが崩れるという認識を披歴していた。このような国際的な状況下で、アジアやヨーロッパに於ける情勢の変化を懸

念し、戦後の現状維持を望む日露両国が急速に接近し、日露協商が成立した。しかし、その結果、日露戦争後の日露両国の外交が、逆に国際関係の激変という結果を齎すことになったのである。次に、ロシア側に於ける当時の同盟国日本に対するイメージは、これまで具体的に検証されていなかったが、知識人階級レベルの対日イメージは肯定的に大きく変化した一方、兵士を含む一般庶民レベルの対日イメージは改善された面と同時に、日露戦争期に形成された警戒感、敗北感の苦渋は根強く残存していたという側面もあった。その点が、その後のシベリア出兵も相俟って、後のソ連の対日外交にも深刻で複雑な影響を投影することになった。

第5に、ロシア外相イズヴォルスキーは、日露関係が満足な成果、つまり日露協商が成立しなければ、英露協商の締結にも躊躇すること、さらにはフランス政府に対して、日露協商が満足な結果を得ないと財政窮乏に苦しみ、南満州などの戦後経営に専念しなければならなかった日本の外債を引き受けるのは望ましくないと述べ、日本に対しても日露接近、極東の安定を求めるために強い圧力をかけていた。

イギリスのグレー外相も、ロシアは国内事情によって侵略政策を放棄し、日本や列国と協調することが望ましいと結論し、日露、英露協商は並行して進めるべきであるという考えを披歴していた。その一方、日米関係は、血縁関係の濃い英米関係の強い紐帯状況に直面すると、日本は対米関係に関する限りは、イギリスの外交的、軍事的な支持が得られないという状況が、この時期、既に瞥見され、その後、顕在化することになった。

以上のように、日露戦争後、日露両国は、基本的には新聞、雑誌などの特派員による報道によって、相互のイメージ、特にロシアの日本や日本人に対するイメージが大幅に改善されることになった。また両国の外交的視点から、当時、辛亥革命などが予想された中国に於ける満州、蒙古などの勢力範囲の設定という相互の国益の確保、増進のために接近した。そして関係各国も冷徹な国際政治的判断によって、自身の国益確保のために日露両国に外交的な働きかけを強化したのであった。これらのことは、現代の日口関係に於いてもマスコミ等に現れる相互のイメージの改善が求められること、また相互の国益の認知、確保が必要であることを示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

1. セルゲイ・トルストグゾフ, Russian-Japanese Relations after the Russo-Japanese War in the Context of World Politics, *Japan Forum*, Vol.28-3, 2016, London and New York, Routledge (査読有)(印刷中)
2. ユリア・ミハイロバ, 「若手ロシア人研究者による1916年の日露協約の研究 現代のための教訓」『ロシア・東欧研究』第44巻, 44-55頁(2016)(査読有)
3. ユリア・ミハイロバ, 「敵意の克服—ネミロ

ヴィチ=ダンチェンコ作『太平洋の古代ギリシヤ人』, 『セーヴェル』31号, 135-145, 2015年, (査読有)

4. ユリア・ミハイロバ, *Образы японских женщин в открытках (1900-1940)* (「絵はがきにおける日本女性のイメージ〔1900-1940〕」) *Традиционная культура и история Японии* (『日本の歴史と伝統文化』) №8, Российский Государственный Гуманитарный Университет (ロシア国立人文科学大学編シリーズ), 2015, стр. 373-387 (査読有)
5. ユリア・ミハイロバ, *The Visual Language of Japanese Political Cartoons - Images of Prime Minister Koizumi Junichiro*, Russian Association of Japanese Studies, <http://japanstudies.ru/index.php?option=com_content&task=view&id=247&Itemid=63> (2012)(査読有)

〔学会発表〕(計3件)

1. ユリア・ミハイロバ, “Once Pain Turns into Fun: Japan’s Territorial Problems”, Oslo University(Norway), Department of Culture Studies and Oriental Languages, March10-11, 2016
2. セルゲイ・トルストグゾフ, “Russo-Japanese Rapprochement and the Entente (1905-1907)”, 14th Conference of the European Association for Japanese Studies, Ljubljana (Slovenija), August 27-29, 2014
3. セルゲイ・トルストグゾフ, “Russo-Japanese Rapprochement in the International Context (1905-1907)” Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies “1913-2013 for Eurasia: A Great Experiment or a Lost Century?” Osaka, Japan, August 9-10, 2013

〔図書〕(計5件)

1. ユリア・ミハイロバ, “Образы Японии в России во второй половине XIX - начале XX вв.” (「世紀転換期ロシアにおける日本のイメージ」) *Российско-японские отношения в формате параллельной истории, К 160-летию Симодского трактата* (『日口関係史: パラレル・ヒストリー - 下田條約の160年記念に際して), ред. А.В. Толкунов, Д. В. Стрельцов, Йокибэ Макото, Нобуо Симотомай (et.al.) (A.V.トルクノフ, D.V.ストレルツォフ, 五百旗頭真, 下斗米伸夫編) Москва:ИздательствоМГИМО-университет, сс.112-136 (2015) (査読有)
2. ユリア・ミハイロバ, 「世紀転換期ロシアにおける日本のイメージ」『日口関係史: パラレルヒストリーの挑戦』五百旗頭真, 下斗米伸夫, A.V.トルクノフ, D.V.ストレルツォフ編 (東京大学出版会) 72-92頁, 2015年9月 (査読有)

- 3 . 寺本康俊, “Японская дипломатия накануне и после русско-японской войны –поворотный пункт на пути к Тихоокеанской войне“ (「日露戦争前後の日本外交 太平洋戦争へのターニングポイント」) : *ЯПОНИЯ (культурные традиции в меняющемся социуме)* (『日本〔変容する社会における文化的伝統〕』) , САНКТ-ПЕТЕРБУРГСКИЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ УНИВЕРСИТЕТ(Санкт-Петербург国立大学出版部), 2014 , №5, С.246-280 (査読有)
- 4 . *ユリア・ミハイロバ*, Война длиною целый век" (「1世紀続いた戦争」), "Тема войны в современной японской манга и изображение России" (「現代日本漫画における『戦争』」) *Россия и Япония. Национальная идентичность сквозь призму образов. Петербургское востоковедение* (『ロシアと日本：イメージを通じて見るナショナル・アイデンティティ』編集、翻訳者と2件の論文の執筆、出版社： Санкт-Петербург東洋学、2014年。240頁) (査読有)
- 5 . 寺本康俊, 「日俄戦争和日美崛起の时代 1895-1908年」(袁原と分担執筆), 五百旗頭真編『日美关系史』(中国)世界知识出版社, 2012年, 31-55 (査読有)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

寺本 康俊 (TERAMOTO YASUTOSHI)

広島大学・大学院社会科学研究所・教授

研究者番号：

00172106

(2)研究分担者

ユリア・ミハイロバ (YURIA MIKHAILOVA)

広島市立大学・国際学部・名誉教授

研究者番号：

00285420